
J E W E L

K A Z U H

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JEWEL

【Nコード】

N3740E

【作者名】

KAZUH

【あらすじ】

主人公小川弘司（ヒロ28才）は、いつも行くパチンコ屋にてお気に入りの女の子のMAOと出会う。彼女はなんとか誘いにOKしてくれたが、2人は既婚同士。これから始まる虚しい恋愛に2人の結末はいかに・・・。

出会い

2002年 1月

「あと、30分で19時か．．．。早く帰らないと、また怒られるよ（汗）！。またサバチャン（スロットのボーナスゲーム）来ちゃった。こりゃ帰れないな．．．。」

仕事の後、パチ屋（パチンコ屋）に寄るのがいつもの日課だった。何故なら、その店には、僕のお氣に入りの子が働いているからだ。

「ま、いいか、今日はコインも沢山あるし、またちよつと誤ればいいからな．．。」

それから、しばらくプレーしていると。列の端から、灰皿を回収する彼女がやってきた。

「やつべ、きた．．。」

いつもなら、自分の所にやってきた時は、恥ずかしさのあまり、目を合わさずに軽く会釈する程度だったが、今日は儲かっている事もあって気持ちに余裕があった。こんな場面は僕ばかりじゃなく、誰でも経験している事じゃないだろうか。

彼女「いらっしやいませ．．．。灰皿失礼しまーす、ありがとうございます。」

彼女は、ヒ口に微笑みながら接した。この店は、あまり人気がないせいか、いつもガラガラだ。きょうもこの島（通路）には、ヒ口と、

数人の50歳ぐらいの客しかいなかった。ちょうど僕の周りには誰もいなく、店のBGMで周りに話声が聞こえない状況だった。またとないチャンスじゃないだろうか……。勇気を振り絞って話しかける事にした。

ヒロ「あつ、ちょっとまって、」

彼女「はい？」

ヒロ「今日何時まで営業？」

彼女「昨日は新台入替の日で10時でしたが、今日は通常営業ですよ。ごゆっくり。」

彼女は姿勢を少し落とし、僕の目を覗き込むような感じで接してきた。あたかも「僕にだけ」のような接し方で。まあどの店も接客マナーがあり、当たり前前の事なんだが。じつは僕も夜だけパチ屋（パチンコ屋）にアルバイトをしていた。やはり、僕も同じような教育を受けていた為、その辺は解るつもりだ。

それにしても、けっこーやばかった（汗）。あれ以上話すのは無理だ。あいつ、俺より接客が上手いな、でもなんか、誘ってるような感じも受けた。（勘違い）でも誘ってみる価値はありそうだ。だったら今日行くしかねーじゃん？この勢いで。でも、この時間からいるとすると、独身の人かなあ、歳は25ってとこか。ダメ元でいってみるかあ、失敗したら二度と来れないけど。それにしても、かわいー。つとに、おれのものにしたい。

時間がしばらく経ち、コインの箱も半分減ってきたところで止めることにした。ヒロは彼女がまた島内に入ってくるのを見計らって、

交換を頼んだ。

彼女「終わりにしますか？それでは、運びますのでカウンターの前でお待ちください」

このチャンスを逃したらきつと後悔する。絶対誘ってやる。ヒロの心臓の鼓動はもうレッドゾーンに突入していた。きょうのヒロはスロットの勝ち負けより、そっちの勝ち負けの方が重要だった。

彼女「5927枚です。ありがとうございます。またお越しくださいませ」

彼女の笑顔にびびってなんかいられない。今だ！。僕は勢いで彼女を誘いにかかった。

ヒロ「あの、前から言おうとしていたんだけど、……。今度、食事に誘ってもいいですか？」

彼女「はい？」

聞き直すなよ、ハズカシイじゃんかよ。もう1回。

ヒロ「今度、食事に誘いたいんだけど、迷惑かなあ。」

それを聞いて彼女はあまりの突然にびっくりして両手を口に押し当てて2・3秒固まってしまった。

彼女「私、結婚してますよ。子供も2人いるし……。」「2人じやあ、やだ。旦那にみつかったらヤバイから。みんなとならないですよ。」

何とか行けそうだ。

ヒロ「いいですよ、結婚していても。俺も同じだし……。みんなって、合コンならって事？」

彼女「あつ、悪いんだー。いいのー？見つかったても奥さんに」

彼女は笑いながら言った。

彼女「じゃあ、今度ね。」何とかOKしてくれた。彼女は少し怪しそうな目で見ていたが、悪い印象には思っていないようだった。

僕は景品を交換し、車に戻り、携帯の番号をメモ帳に書いてふたたび店のカウンターに行った。

ヒロ「これ、俺の番号だけど、よかったら掛けて。」 4つ折にしたメモを他の店員に見つからないように彼女に渡した。

彼女「はいはい（笑）」 彼女は心よく受け取ってくれた。

ヒロ「じゃあ、また」

彼女「うん。」 ヒロは胸をなでおろし、店を出た。

「あー言ってたけど大丈夫かなあ、でも、収穫はあった。金も儲かったし……。もし、掛かってきたら、今度は名前とか、歳とか、いろいろ聞こう。」

ヒロは彼女からの電話に期待し、家路についた。

次の日

ちょうど僕は一人の仕事だったので昨日の事を思い出しながら作業をしていた。

「このタイミングで掛かって来たら奇跡だよな」　そう思いながら仕事を続けていると、

いきなり、携帯が鳴った。まさかと思い、携帯の画面を見ると会社の上司だった。

「こっちの現場が忙しいから今日は一人で作業をやってくれ。」

上司はそう言って電話を切った。

「びっくりさせやがって、あの子かと思ったじゃんか。」

でも、一人で仕事って事は、いつでも電話がかかってきても大丈夫って事だ。そう思っている時、また電話が鳴った。

「うわっ、きたよ、ウソみてえ。」　番号だけなのでおそらく

彼女からだと思った。

ヒロ「も、もしもし小川です」

彼女「小川弘司さんですか？私、昨日の店の・・・。」

ヒロ「はいっ、昨日はどうも、今大丈夫？電話。」

彼女「仕事中かと思ったけど、今しか掛けないから・・・。でも、

昨日はびつくりしたあ。あの後、事務所でカメラで見られてて、問い詰められちゃった。」

「もらった紙、ごみ箱に一旦捨てたフリしてごまかしたけど。うちの店、そーゆーのうるさいから。」

ヒロ「悪い事しちゃったみたいだね。でも、あーするしか無かったから。待ち伏せて手もあつたけど、ストーカーじみた事したら多分今みたいに掛かって来なかっただろーしね。」

彼女「でも、何回があつたよこーゆーの。（笑）」

かなり慣れていそうだ。

彼女「誤解しないでよ、誘われてほいほい付いていく女じゃないからね。でも、一回だけあつたかなあ、でもその人、カラオケいこーって言うて行くまではいいけど、いきなり体密着して来るから断って帰った。でも、なんか、小川さんの場合は顔から汗が出ていたから一応信用して掛けてみた。」

彼女「仕事中心なんでしょう？大丈夫？。」

ヒロ「大丈夫だよ、今俺一人しかないし。所で名前聞いてなかったね、教えてよ。」

彼女「じゃあね、MAOでいいよ。まだ、全部は教えない。（笑）」

ヒロ「じゃあねって。。。俺は弘司だけど ヒロでいいよ。じゃあ、MAOさんは、夜、パチ屋にバイトをしてて、昼は専業主婦なんだあ。子供は？。」

MAO「2人いるけど今は幼稚園。ヒロさんも、子供いるんだよね、何人？」

ヒロ「一人だよ。MAOさんと同じで、幼稚園。今年小学校。」

MAO「同じじゃん。（笑）所で、ヒロさんはよくあーゆー事するの？昨日みたいな事。よく出来るなあって思つて。（笑）」

ヒロ「俺も初めてだけどね。顔の汗で信用してよ。」

MAO「じゃ、そうゆー事にしとく。（笑）あつ、もう買い物行かなきゃなんないから切るよ。それと、合コンの事、お願いします。（笑）じゃあね。」

ヒロ「うん、じゃまた連絡するよ。あつ、それとねー。俺もやってんだあ、パチ屋のバイト。じゃ。」

MAO「ええ！」　プチッ（電話を切った）

電話を掛け終わってみると昨日の緊張は解けていた。

「なかなか面白い子じゃん。やべつ、歳、聞くの忘れた。でも、子供が俺の子と同じ年って事は、俺と同じ年ぐらいかなあ。返って人妻の方が案外いろんな面で楽かも。やつべ、早く仕事終わりにしたいと叱られる」

「でも、合コンとなると何人か人集めなきゃならないし、みんな夜なかなか出られないからなあ。どうしょ。適当に集まらなかつたって言つて、二人で会う方法を考えなきゃな。」

「でも、次からはこっちから電話掛けられるな。慎重に行かないと。」

ヒロの欲望は、ますますエスカレートしていく・・・

その日、家に帰ろうとしたが、MAOの居るあの店に行ってみる事にした。

「あんまり、行くとしつこく思われるな」

ヒロは心配になったがあれこれ考えている内にパチンコ屋の前までやって来てしまった。

「やべ、また緊張してきた・・・。」

ヒロは財布の奥からあらかじめメルアドを書いたメモを取り出し、店の中へと入って行った。店の客は昨日と変わらずガラガラモードだった。

「返ってガラガラだとまたカメラで見られて彼女に迷惑が掛かるな。」

そう思ったヒロはそのままにスロットコーナーの方へ行き、カウンターの見える席でしばらく遊技をしながら様子をうかがう事にした。MAOもヒロが来店した事に気が付いたらしく、カウンターから小さく手を振ってくれた。

「もう、緊張しなくてもよさそうだ。」

そう思ったヒロは一旦遊技をやめ、MAOにアドレスのメモを渡しに行こうとカウンターへ近づいた。

すると、40才ぐらいのちよつと小太りの店員が何か言いたげな顔をしながらヒロに話かけてきた。

店員「昨日ウチの従業員に何か紙を渡しましたよね、そーゆー事なされますと非常に困りますのでやめていただきたいのですが・・・」
一応、防犯の関係もありますので。」

いきなり横槍をくらわされた。MAOも、目の前の出来事にあ然とし、その後ちよつと笑っていた。ヒロはヤバイと思い、元にした台の席に戻った。しばらくおとなしく遊技をしていると、カウンターにはMAOは居なくなり、別の女の店員が立っていた。

「ちくしょう、事務所の中に入れやがったな・・・。」

そう思い、もうこれ以上いても今日はムリだと思ったヒロは席を立った。

ヒロはカウンターの前を通り出口へ向かおうとした時、先ほどカウンターに居た女の店員が飾ってある景品を整理しながら話かけてきた。

女の店員「MAOの友達ですよ、さつきMAOが、もし帰ろうとしたら、まだ止めておいてって、頼まれているんですよ。もうちよつと居てもらえますか？。MAO、今休憩入ってもうちよつとしたらホールに出て来ますから・・・。」

「MAOさんの友達だろうか？。 同い年ぐらいだし。 でも、MAOさんの方からそう言って来るって事は、彼女も俺の事ちよつとは興味を持ってくれたって事かなあ。」

そう思ったヒロはもうしばらく席で待つ事にした。すると、休憩からもどったMAOがホールに出て来てヒロの所にやってきた。

MAO「（笑）さっきはごめん、あれ、うちの主任で、昨日私が叱られたって人。今は私と交代で休憩入ってるから大丈夫だけど。でね、あの子はウチの友達のユ一子。かわいいっしょ？。」 MAOは笑いながらヒロに話かけた。

ヒロ「またカメラで見られてるぜ（笑）。」

MAO「今は外にタバコを買いに行ってるから大丈夫。ここに置いてないタバコだから向かいのコンビニに行った。」

MAO「あっそうそう、これ、メルアドね。休憩中に書いた。（笑）。一応大丈夫そうだから・・・。」 MAOはアドレスの書いたメモをヒロに渡した。

ヒロ「ありがと、俺も今日渡そうと思った（笑）。じゃ、せっかくだから渡しとくよ。」 逆に向こうから渡してきて、しかも相手の気持ちまで知る事が出来たから大収穫ではないだろうか。 ヒロもメモを書いた紙をMAOに渡した。

ヒロ「メールとか旦那に見つかったらヤバいんじゃない？。」

MAO「うちは平気だよ、だって、いつも友達とかからも来るもん。」

ヒロさんは？。」

ヒロ「俺も大丈夫だよ。だって、うちの奥さんそういう事に関しては怪しまないし、俺だって友達から頻繁に来るもん。」

MAO「友達って、ヒロさんが今まで誘った女の人から？（笑）。」

ヒロ「違うっつーの！。」

MAO「（笑）冗談冗談。じゃあ、暇な時いつでもメール入れて。」

ヒロ「うん、わかった。」

MAO「あつ、そろそろ主任が帰ってくる頃だから、じゃあね。」

MAOは何事も無かったかのように、仕事に戻った。ヒロもそろそろ店を出る事にした。

（マイク放送）「。。。番台、フィーバースタート、おめでとうございまーす・・・」 帰り際、ちよつとハスキー気味の彼女のマイクパフォーマンスが聞こえてきた。

「声もかわいいーなあ！。 ぜってー落とす。もうひと押しだあ、ひゃっほー。」

一人、浮かれるヒロだった。

メール

その日家に帰ったヒロは、彼女についていろいろと考えていた。

「これからケータイの音も消して、あいつ（妻）にバレないようにしないとな」

ヒロはケータイのメールとブッシュ音の音を消した。

「あー、もっとMAOさんと話がしたい。」

ヒロは早速トイレへ行き、メールを入れようとした。だが、ヒロはここはMAOからの出方を窺ってみる事にした。

パチンコ屋は基本的には夜10時30分まで営業だが、その後、機械、台のメンテナンス、釘調整など、カウンターでは、景品の品出しなどを行うので11時、もしくは11時半ごろまで仕事が終わらない。ヒロはMAOの仕事が終わるまで待つ事にした。

23時30分をすぎ、40分ごろになってMAOからのメールが来た。

MAO「おっつー！。今大丈夫？。今日来てくれてありがとう。（^^）ノ　ごめんね、主任が居たからあまり話できなかったね。今日はいくら負けた？（笑）。それと、時間が無くて聞けなかったんだけど、ヒロさんって何処のパチンコ屋で働いてるの？。」

ヒロ「おつかれさん。今かみさん寝ちゃってるから大丈夫。今日は

5千円負けた。あと、俺の店、MAOさんの店の近くの「スリーA」だよ。」

MAO「えっ、しらなかったー。私いつもその店に「*頭取り」に行くんだよ。」

*頭取りとは、店の店員がライバル店の客の入客を調べる事である。ホールの中に入って頭の数を数える事で、頭取りと呼ぶ。

ヒロ「マジ!?、じゃあ何時頃?」

MAO「20時前(^^)v。」

ヒロ「じゃ俺が入るの20時だからその前じゃん。でMAOさんは何曜日に入ってるのシフト。」

MAO「水、金、土だよ。ヒロさんは?。」

ヒロ「月、木、日。全然違うね。でもMAOさんもたまには頭取りだけじゃなくて打ちにも来なよ。」

MAO「だめだめ。あそこの店員一人ヤラシー人がいて、この前なんか、食事誘ってもいいかなーってナンパして来たもん(笑)。」

ヒロ「それ、俺じゃん(笑)。ヤラシーってどー言う意味(怒)。」

MAO「わかったわかった、冗談(笑)。でも積極的だから早速メール入って来るとおもったケド、入って無かったじゃん。やっぱり奥さんが居るとメールは出来ない?。」

ヒロ「やっぱ、あからさまだと怪しまれるし。」

MAO「愛されてるじゃん（笑）。」

ヒロ「そーかなあ。」

MAOとヒロは時間も忘れ、メールを打ったり待ったりとやり取りを繰り返していた。

MAO「ヒロさんって歳いくつですか？。30歳くらい？。」

ヒロ「あたりー！三十路だもつ。MAOさんは？。」 問

MAO「何歳に見える？。」 女
て大体聞いてくるんだよねー。

ヒロ「25とか？。」

MAO「うっそー、うれしい。そのぐらいに見える？。」

ヒロ「だいたいこーゆー時は下から順に聞くじゃん（笑）。もっと上？27とか28とか・・・もしかして30以上？（笑）。」

MAO「違います（怒）29でした。見えないっしょ（笑）。」

ヒロ「へー、見えなかった・・・。てっきり25歳かと思った。」

MAO「私、童顔だからいつも下に見られる。背も低いしね。でもヒロさんだけだよ、男の人に下に見られるの。」

「29かあ、あまり下だと話しも合わないそうだし、ちょうどいいな。」
喜んでいるうちに、時間はもう1時過ぎ。ヒロはあまりの時間の経過にMAOの事が心配になった。

ヒロ「そーいえば、大丈夫？もう家にいるよね？」

MAO「まだ。まだ道の横に止まってメールしてる。家あんまり帰りたくないから・・・。」 どうしたんだろ。何か事情がありそうだ。ヒロはMAOの家庭の事を聞いた。

ヒロ「なんで？子供だって居るじゃん。」

MAO「・・・そうなんだけど。家のダンナ、今私バイトしてるでしょ？、もーその事でうるさくって。「行くなとか、やめる。」とかもう、いつも言われるから、うんざり。話もしたくない。」

ヒロ「バイトは辞められないの？」

MAO「うん、生活は苦しくないけど、私だって専業主婦で一生終わりたくないもん。ヒロさんが辞めろって言うならやめよーかなあ（笑）。」

ヒロ「そーなると俺あの店行く意味ねーじゃん（怒）。」

MAO「あははは（^^）v」
.....

ヒロ「からかってるっしょ（怒）。」

MAO「だっておもしろいもん。〇（ハ・ハ）〇ヒロさんからかつてると（笑）。でね、もう、ダンナとは別れようかなあって思ってる。子供2人連れて出て行こうかなあって。私一人で十分働いてお金稼げるし……。まー、あんま甘くないケドね。毎日家に居て、ごはんつくって、洗濯物干して買い物行って。で、ダンナにはあんま外出なくなっていわれるし……。こーやってメールしてる時が一番自由って思う。」

MAO「ごめんね。家のダンナの愚痴なんか言って（ハ・ハ；）。」

MAOはヒロをからかいながらも、切実に家の事情を語った。

ヒロ「いいよ、MAOさんが少しでもこのメールでストレスが無くなってくれれば。俺だってメールしてて楽しいもん。」

MAO「ありがと、少し気持ちが楽になった。」

ヒロ「まー、俺もやつぱ、専業主婦の意見ってなるとちよつと胸にグサって来る。」

MAO「そーだよ。奥さん大切にしなきゃ。こんなメール止めてはやく奥さんと寝てやんな（笑）。なあーんてね。気持ちが楽になった所でもう帰る。朝、ダンナの弁当つくくなきゃ、ダンナ今日仕事だから。もう帰って寝るね。今日はありがと。じゃ。」

「勝手にメール切っちゃった……。」

MAOは一方的にメールを切った。時間はすでに2時過ぎ。ヒロの携帯もすでに電池がギリギリ状態だった。

「あの子、かなり家庭に疲れてるみたいだな。俺がもっと癒してやんなきゃな。でも、あの子も結構やり取りしてく内に俺との会話を楽しんでくれてたよな。」

ヒロは携帯を充電し、寝についた。

次の日

今日は日曜日。本業は休みではあるが、夜、アルバイトの日だった。ヒロはMAOの事が気になり、メールを入れた。

「オッス。昨日はどうも（^^）V。あの後帰って大丈夫だった？」
「しかし、いくら待ってもMAOからのメールが届かなかった。ヒロは何か昨日は悪い事言ったのかなあと、心配になった。

「何か昨日悪い事言ったのかなあ。！、それとも、帰ってからダンナとモメたのかな？。」 いずれにせよ、何かあったに違いない。ヒロはMAOの事が心配になりながらも、もうアルバイトに行かなければならなかったので行く事にした。

マイク放送「ガヤガヤ・・さあ、はりきって参りましょう、お次のボーナスゲーム、67番台68番台、2台揃いましての・・。」

店はいつもの調子で満席状態だった。ヒロは汗をハンカチでぬぐいながらマイク放送をしていた。その時、呼び出しランプがひかり、ドル箱を持って島内に入り、お客さんのドル箱を椅子の下へと置いた時である。背中を軽くポンポンと叩かれたので「はいっ！。」と、答えながら振り向いた。そこにはMAOが座っていた。

MAO「おっつー（笑）。忙しそうじゃん。おっ、顔に汗（笑）。」

MAOはすでに、2箱ドル箱を貯めていた。ヒロは、まさかMAOが居ると思わなかったのでびっくりした。

他の店員「小川さん、隣の島行つて。二名様・・・。」
「イヤホンから忙しそうにお客の対応を頼まれた。」

ヒロ「ごめん、忙しくつて。また、後でね。」
「話したい事が山ほどあったが、店がすいてくるまでヒロは待った。」

MAO「もう行くね、じゃあね。がんばつて。」MAOは何か話をしたかったんだろうか・・・？。寂しそうな感じで店を出て行った。

午後10時半になり、店の閉店の時間がやってきた。ヒロは休憩中も携帯をチエックしたがMAOからのメールが無い事に不安になっていた。閉店作業を終え、タイムカードを押し、自分の車までヒロは走った。当てはないがMAOの店へ行けば、もしかしたら居るんじゃないかと思い。

ヒロは車に乗り込み、エンジンをかけた。先ほども、小雨がぱらついていたのだろうか、フロントガラスには水滴がついていた。ヒロはワイパーを動かそうとレバーを引いた、「ゴロンゴロン」何か転がったような音がしたので、ヒロは外へ見に行った。

「なんだこれ。」
ヒロはコーヒーの缶があるのに気がついた。拾ってみると裏に紙切れのような物がテープで貼ってあった。MAOからである。

MAO「おつつー。よくわかったね。さっき渡そうと思ったんだけど、ウチの店みたいにならなくて怒られてもなってるから、渡せなかった。どうして車がわかったのかって？

それは後で。書く所無いから。○○○○ー○○ー○○○○に掛けてじゃ。」 小雨のせいかな少し字がばやけていた。

「何処だろ・・・？。MAOさん家かなあ。んなわきゃねーか。掛けてみるか・・・。」

ヒロは電話を掛ける事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3740e/>

J E W E L

2010年11月14日01時45分発行